

第三章 「口伝の真信」の核心——悪人成仏のため（2）

加来 雄之

「浄土真宗のひとは悪人になりて成仏す」

第三章 原文・先人訳

蓮如書写本第三章 (段落と番号①～⑦は加来による)	第三章先人訳（安良岡口訳）（『歎異抄全講読』99 頁） * [] は補ったと思われる箇所。下線は検討したい箇所。
三 一 ①善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。 ②しかるを、世のひとつねにいはく、悪人なを往生す、いかにいはんや 善人をや。 ③この条、一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。 ④そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのみこゝろかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。 ⑤しかれども、自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。 ⑥煩惱具足のわれらは、いづれの行にても、生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり。 ⑦よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき。	第三章 一 ①善人でさえやはり、往生を果たすのだ。まして、悪人は言うまでもないのだ。 ②それなのに、世間の人は、いつも、「悪人でさえ往生する。まして、善人は言うまでもない」と言っている。 ③このことは、一応は、理由があることに <u>近いようであるが、本願と他力との趣旨に反している</u> 。 ④その理由は、 <u>自己の力を信じて善事を実行する人</u> は、〔仏の〕他力を〔ひたすらに〕頼りに思う心が欠けているので、阿弥陀仏の本願〔を受けとるべき性質のもの〕ではない。 ⑤そうではあるがしかし、〔その〕自力の心を根本から転換させて、〔仏の〕他力をお頼み申し上げれば、真実の <u>浄土</u> の往生を果たすことになるのだ。 ⑥ <u>煩惱が十分に身に備わっているわたくしたちは</u> 、どのような修行によっても、生死〔を続ける迷いの境地〕を <u>完全に脱け出る</u> ことがあるはずがないということをふびんにお思いになって、〔救いとうろとなされる本〕願をお起こしになった、根本の御意志は、〔善人よりも、〕悪人が仏と成るためであるから、〔仏の〕他力をお頼み申し上げる悪人こそ、 <u>ほんとうに、往生〔できる〕正しい種</u> なのである。 ⑦ <u>それゆえに</u> 、「善人さえも往生するのだ。ましてなおさら、悪人は <u>〔必ず往生できるのだ〕</u> 」と、〔親鸞聖人は〕おっしゃいました。

I 前回の復習

(1) 第三章の冒頭のことば①のインパクトは、「悪人でも」「悪人さえ」ではなく「いわんや悪人をや」つまり「悪人こそ」という表現にある。①の言葉は、私たちの往生観を揺り動かす力をもっているが、それだけでは真意を受けとめることが難しい。この①がもつ衝撃と力強さの根拠を解き明かすのが『歎異抄』第三章における②以下の展開であろう。

(2) ①の文頭の言葉と⑦の文末の「おほせ」との差等について。

①の文は、「なおもて」「いわんや」という二つの副詞が、世間の常識を覆す有力な強調となっている。注意すべきは「善人でさえ往生をとぐ」のであって、善人の往生を否定しているのではない。

①「 善人なをもて 往生をとく いはんや 悪人をや」

⑦「よて 善人たにこそ 往生すれ まして 悪人は 」とおほせさふらひき」

①と⑤は単なる繰り返しではない。①はおそらく源空の仰せにもとづき⑤は「そのゆへは」から始まる③④の確かめを通したうえで、「よて」と結論される①の言葉は親鸞自身による受けとめ直しとして理解したい。少なくとも第三章において親鸞は①を「おほせ」とは位置づけていない。このことから①は親鸞にとっての法然のおほせ、⑦は唯円にとっての親鸞のおほせと単純に考えることはできない。

そのことに注意すると、①は反語として問題提起的であり、⑤は確信的な表現である。

⑤を親鸞の仰せと理解するときには「よて」「とおほせそうらいき」の訳を工夫する必要がある。「とおほせそふらいき」という結びの問題については次回に取りあげる予定である。ちなみに最近、鶴留正智氏が日本印度学仏教学会の大会で発表している。

(3) 前回、①に「とぐ」という表現があることに注意したいと述べた。なぜ「とぐ」という表現が必要だったのだろうか。①「往生をとぐ」と②⑦の「往生す」とはどのように異なるのであろうか。今回の④⑤の読解を通して確かめたい。

(4) 第三章の背景となっているいわゆる「機の深信」に対する私の理解を大きく変えたのが、次の曾我量深の見解である。

「機の深信は宿業の自覚というわけではないが、宿業の自覚、それを深信する。「わが身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し、常に流轉して出離の縁あることなし」は、宿業の自覚である。その自覚についての深信である。深信すなわち宿業の自覚であるといってもよいが、くわしくいうと、宿業の自覚についての深信である。自覚に随順する、深信する。自覚も深信がなければ自覚ということにならぬ。深信によって自覚がその意義をまっとうじて、自覚としての具体的内容をもってくる。深信と宿業の自覚と互いに内外相応して、それ自身を深めていくとわたくしはこう思っている。

〔…中略…〕 機の深信は法蔵菩薩の自覚とこのように自分は考えていたのである。機の

深信のところに法蔵菩薩の眼を開く。機の深信というと罪惡生死の凡夫ということ、それがどうして法蔵菩薩の眼を開くのか。法蔵菩薩というと、阿弥陀如来の因位のお姿である。〔…中略…〕機の深信ということによって法蔵菩薩を感知する。〔…中略…〕わたくしは、親さまが一切衆生の罪となやみと、それをあなた一身になって、そしてあらわれてくださった。それが法蔵菩薩である。」

（曾我量深『歎異抄聴記』第十一講、一 宿業の自覚と機の深信より抜粋）

曾我の見解を通せば、『歎異抄』第三章の「悪人」の自覚を立体的に考えることができる。私たちは「悪人」という法蔵菩薩の自覚内容を深信するのである。機の深信と呼ばれる文章は以下の通り、□で囲った部分が私たちの深信を、太字の部分法蔵菩薩の宿業の自覚をあらわす。

「一つには決定して深く、**「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」**と信ず。」

「真実の信心とは我々と仏との久遠の昔からの離れぬ、切っても切れぬ血のつながりを信ずる。仏と我々との間に切っても切れぬ深いつながりがあるということが仏の本願を信ずることである。阿弥陀の本願を信ずることによって、ほんとうに自己を深く信ずることが出来る。これを真実信心という。」

（曾我量深「信仰の純潔」真人社 p. 92）

ただ『歎異抄聴記』には次のような表現もある。

「これは善人というのも悪人というのもその人の自覚である。なにか他人をさして善人悪人というのではない。自分をぬきにしてどこかに善人悪人があり、その中の悪人を正機とするというのではない。これはやはり機の深信、〔中略〕自分みずから出離菩提の因もなく、往生の手がかりもないと自覚している人が悪人。」（曾我量深『歎異抄聴記』）

「善惡共に宿業である。法よりみれば善人悪人は平等であるが、本願の正機としての機よりみれば悪人を以て本願の正機として、これがために仏は選択本願を発し不可思議兆載永劫の御苦勞をされたのである。」（曾我量深『歎異抄聴記』）

ちなみに曾我の教えを受けた安田理深は、二種深信のうち、自身を深信する「機の深信」が深信の目的であり、彼の願力に乗じて深信する「法の深信」は深信の方法を示していると述べているが、この理解は、機の深信を法の深信の理解の前提とする通俗的な理解を揺るがしてくる。また「深信とは強い信心ではなく深い信心である」（「随想ノート No. 11「五五機の深信」『安田理深選集』別巻、368 頁）と指摘している。

・第三章の悪人とは、本願が見いだした真の人間である。人間の実相である。第三章でいう悪人とは「煩惱具足のわれらはいずれの行にても生死をはなるることあるべからざる」存

在である。「悪人」とは、「さるべき業縁のもよおさばいかなるふるまいもすべし」と押さえられる業縁存在の自覚である。

次回、⑤⑥の講義で明らかにするつもりであるが、善人であることによって往生するのではなく、悪人であることによって往生するのでもない、「煩惱具足のわれら」・「他力をたのみたてまつる悪人」と自覚することが往生の因なのである。

②しかるを、世のひとつねにいはく、悪人なを往生す、いかにいはんや 善人をや。

(②それなのに、世間の人は、いつも、「悪人でさえ往生する。まして、善人は言うまでもない」と言っている。)

・「しかるを」からは冒頭に掲げた①の言葉に反する見解が「世のひとつねにいはく」として引用される。「世のひとつねにいはく」とは、善悪について世間的常識的な立場をかえりみることのない人たちのかたりであろう。『歎異抄』は善悪にとらわれるかたりを本願の立場から批判することを主題の一つとしている。そして「つねにいはく」とは、後述に示される「聖人のつねのおおせ」が「五劫思惟の願をよくよく案ずる」姿勢にもとづくものであることに対する。

①冒頭のおおせと②「世に人つねいはく」を比較すると次のような表現上の異なりがある。

①「善人なをもて往生をとぐ、いはんや、悪人をや。」

②「悪人なを 往生す、いかにいはんや、善人をや。」

①は「もて」によって「なお」を強調し、「をとぐ」によって善人の往生が「とぐ」ということを必要とすることをあらわす。仕方をあらわす。②では、後半の「いはんや」の句に「いかに」という強調が加えられている。

この二つの微妙な異なりが意図することについて、安良岡は「前の「況んや悪人をや」に対して、「いかに況んや、善人をや」という、一段と強調した言い方には、「悪人の往生」の必然性に対する、常識的立場からの強い反撥が示されているようである。この、親鸞の独自の立言と世人の常識見との対立・対照によって、一層、この説示は聞き手の心と耳をひきつけたに相違ない」（安良岡『全講読』107頁）と解している。安良岡の①②の訳し分け方を、⑦もあわせて参照しておきたい。

①「善人でさえやはり、往生を果たすのだ。まして、悪人は言うまでもないのだ。」

②「悪人でさえ 往生する。 まして、善人は言うまでもない」

⑦「善人さえも 往生するのだ。 ましてなおさら、悪人は〔必ず往生できるのだ〕」

但し、⑦の〔〕内は安良岡の補足であるが、私は「〔往生するのだ〕」と表現する方がよいと思う。このことは次回述べる。

③この条、一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。

(③このことは、一応は、理由があることに近いようであるが、本願と他力との趣旨に反している。)

・「この条」という表現は、第十一章から第十八章において異義の見解を指示する語である。

・②の世の人のかたりは、世人が常識とする通俗的善悪観からは道理があるように見えるのである。つまりさまざまな異義が、その根に或る善悪観をもっている。

・安良岡訳の「近いよう」は「見える」と訳したい。

・このような世のひとの善悪観（定散自心、信罪福心）や言説を深く悲しむところに「本願他力の意趣」があることを見失い、そむいてしまっている。

・「本願他力の意趣」について安良岡は、二つの語は「ほとんど接近した意味」として本願とその力とを区別して訳している。私は、「本願他力」という表現は、いわゆる他力ではなく、如来因位の本願によって裏づけられた他力（如来の本願力）であること明示するためと理解したい。そこに親鸞の他力理解の特徴があるからである。

・「本願他力の意趣」とは何か。『歎異抄』では、その意趣が、「そのゆえは罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願」「それほどの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願」などと本願の内容として説かれている。

・「にそむけり」は反しているの意。

④そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむころ かけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。

(④その理由は、自己の力を信じて善事を実行する人は、〔仏の〕他力を〔ひたすらに〕頼りに思う心が欠けているので、阿弥陀仏の本願〔を受けとるべき性質のもの〕ではない。)

・「そのゆへは」以下の④⑤⑥は①と表現される理由を明かすが、とくに④⑤は、①において「善人なおもて往生をとぐ」を表現された理由を解き明かす。

「善人なおもて往生をとぐ」→④⑤

「いはんや悪人をや」→⑥

・「自力作善のひと」の訳について。ここで「善人」とは「自力作善のひと」を意味していることが示される。「自力作善」とは、すでに自力によって善業をなしている人というよりも、自力によって善業をなそうとする人も含むと理解したい。清沢先生の言葉をかりれば、「如来の仕事を盗むもの」である。

・①の「善人」が④において「自力作善のひと」として確かめなおされる。「自力作善のひと」の問題は、「ひとへに他力をたのむころ かけたる」あり方である。つまり他力をた

のむことはあるが、その他力は本願に裏づけられたあり方ではないので、そのあり方は「弥陀の本願にあらず」とされる。

- ・「ひとえに」は「たのむ」にかかると理解したい。他力をたのまないわけではなく、また他力をたのむところがまったくかけているわけでもないが、「ひとえに」「たのむころ」が「かけ」ているのである。もし「ひとえに」を「かけたるあいだ」に係ければ、「自力作善の人は他力をたのむところがまったくない」という意味になる。
- ・「他力をたのむころかけたるあいだ」、「あいだ」は「ので」の意。
- ・「自力作善の人はその環境としてひとへに他力をたのむ心が欠けている」（『歎異抄聴記』153頁）
- ・自力¹の機については「消息」に次のようにある。

「それ、浄土真宗のころは、往生の根機に他力あり、自力あり。このことすでに天竺の論家・浄土の祖師のおおせられたることなり。まず、自力と申すことは、行者のおのおの縁にしたがいて、余の仏号を称念し、余の善根を修行して、わがみをたのみ、わがはからいのころをもつて、身・口・意のみだれごころをつくろい、めでとうなしで、浄土へ往生せんとおもうを、自力と申すなり。また、他力と申すことは、弥陀如来の御ちかいの中に、選択摂取したまえる第十八の念仏往生の本願を信樂するを、他力とは申すなり。如来の御ちかいなれば、「他力には義なきを義とす」と、聖人のおおせごとにてありき。」（『血脈文集』第一通『聖典』（初版）594頁）

⑤しかれども、自力のころを ひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。

（⑤そうではあるがしかし、〔その〕自力の心を根本から転換させて、〔仏の〕他力をお頼み申し上げれば、真実の浄土の往生を果たすことになるのだ。）

・「しかれども」「真実報土の往生をとぐるなり」とあるように、善人は方便化土の世界には生まれる。しかし真実報土に往生するためには機の自覚を果遂しなくてはならない。

- ・「自力のころをひるがえす」

「ころをひるがえして」とは、「ひるがえす」は「今までの態度や説を急に変える。今までと逆にする。反対する。くつがえす。」（『日国大』）であるから、「ころ」そのものを否定するのではなく、「自力をたのむ」ころのあり方から、「自力をたのまない」ころの

¹ 「一念多念のあらそいをなすひとをば、異学別解のひとともうすなり。異学というのは、聖道外道におもむきて、余行を修し、余仏を念ず、吉日良辰をえらび、占相祭祀をこのむものなり。これは外道なり。これらはひとえに自力をたのむものなり。別解は、念仏をしながら、他力をたのまぬなり。別というのは、ひとつなることをふたつにわかちなすことばなり。解は、さとりという、とくということばなり。念仏をしながら自力にさとりのなすなり。かるがゆえに、別解というなり。また、助業をこのむもの、これすなわち自力をはげむひとなり。自力というのは、わがみをたのみ、わがころをたのむ、わがちからをはげみ、わがさまぎまの善根をたのむひとなり。」（『一念多念文意』）

あり方へところの関わり方をまったく変えてしまう。

『歎異抄』第十六章では、回心が一回きりであることを次のように記している。

一向専修のひとにおいては、回心ということ、ただひとたびあるべし。その回心は、日ごろ本願他力真宗をしらざるひと、弥陀の智慧をたまわりて、日ごろのころにては、往生かなうべからずとおもいて、もとのころをひきかえて、本願をたのみまいらすをこそ、回心とはもうしそうらえ。（『聖典』（初版）637 頁）

・また「自力のころをひるがえす」あり方については、いわゆる三願転入の文の「回入」・「転入」・「久入」という願海への入り方をイメージが参考になる。

また、「自力のころ」と「信心」という場合の二つの「ころ・心」の関係は、「ころ・心」の質や段階というよりも、本願をたのむころの層として理解してはどうか。たとえば「自力のころ」と如来の「願心」と衆生の「信心」との関係。

・「自力のころ」—自性唯心や定散自心や信罪福心のこと。ひとを「自力作善」の機とするのが「自力のころ」である。

・「ひるがえして」—「ひるがへ・り」は、「ひらりと裏返る。また、ひらひらとゆれ動くの意。②の「自力のころをひるがえして」は、自力のころを消し無くすと意味ではなく、ころの拠り所を自力から他力に転換することを意味する。

・「他力をたのみたてまつれば」—他力を「たのむ」は親鸞の用法では「憑」である。「憑は、依也・託也・ものにもたれかゝること」（大字典・講談社）。他力の場合の「たのむ」は「を依り処とする」の意である。自力の場合の「たのむ」は「頼」の字がふさわしい。

・「真実報土の往生をとぐるなり」——浄土宗の往生は、凡夫が報土に往生するという説は法然にもあるが、親鸞はその報土を真実報土と方便化土の二つに分けた。

・自力作善の人も如来のはたらきをたのむから方便化土という報土には生まれる。しかし自力の心によって如来の本願の領域である真実の報土に往生することができない。

応化土

報土 — 方便化土（報中の化）

└ 真実報土

「真実報土の往生をとげる」とは阿弥陀の本願の意趣に目覚め、そのはたらきと正しい関係を築き、それに向かって歩みゆくことをあらわす。

・この「自力のころをひるがえして他力をたのみたてまつれば真実報土の往生をとぐるなり」が、①において「善人なおもて往生をとぐ」と、「をとぐ」と表現されなければならなかった意義を解き明かしている。

・⑤は、「そうであるけれども、〔そのような自力作善の人でも、〕自力〔にとらわれた〕心〔に気づき、その心〕をあらためて、他力（＝如来の本願力）を依り処とするようになるなら、真実の報土に往生を果たし遂げることになるのです」ぐらいの意か。